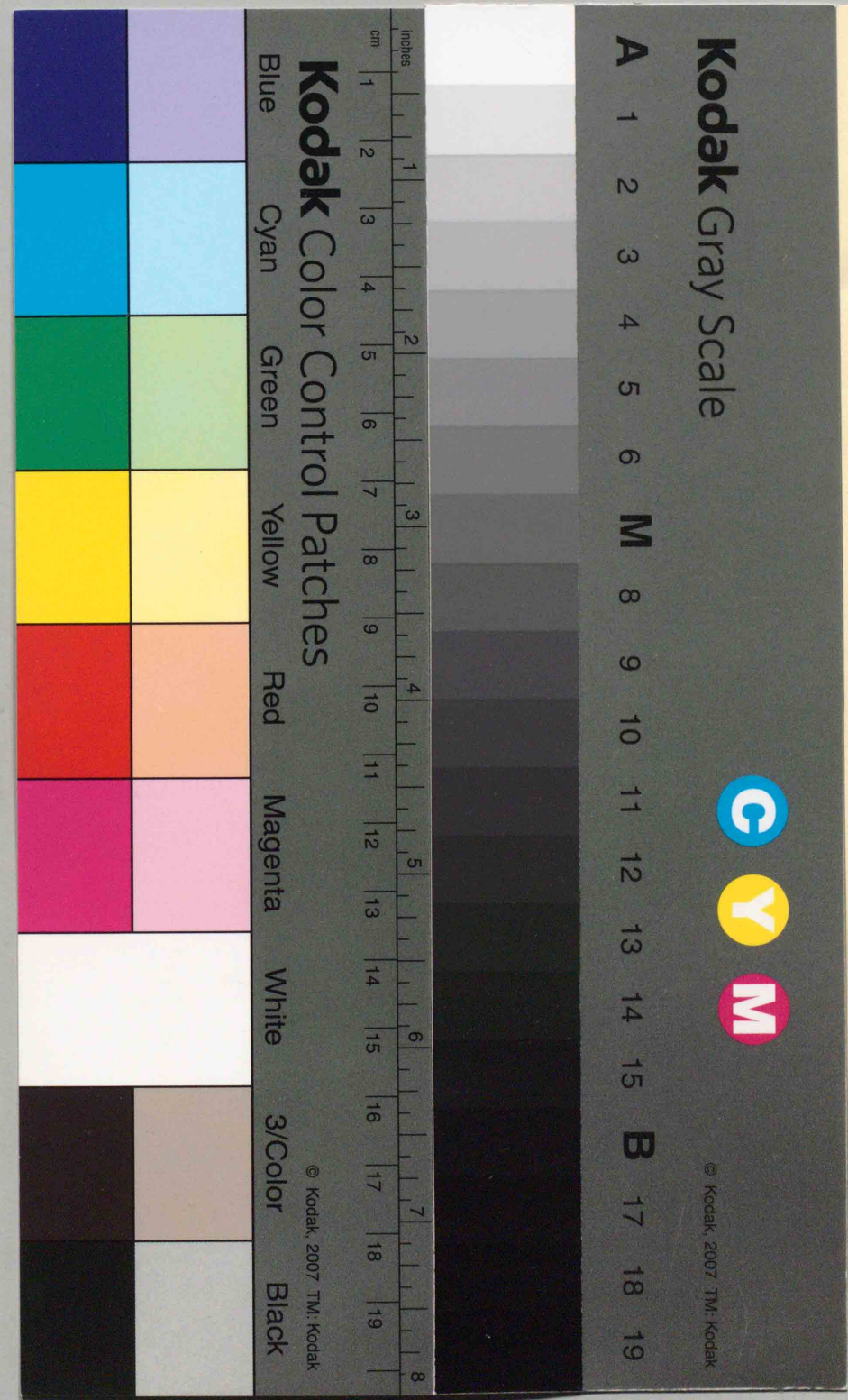
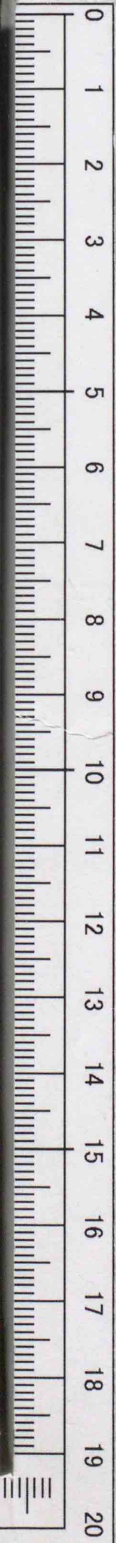


—[正訂]—
 師範學校
 圖書教科書
 卷之四

教科書文庫
 4
 710
 51-1918
 2000301415



40741
 教科書文庫

4
710
51-1918
2000 301415

375.9
Ab5

大正七年一月十日
文部省検定済

師範學校 圖書教範

河野七郎
著

著者

廣島大學
圖書部
蔵



広島大学図書

2000301415



教科書文庫

4

710

51-1918

2000301415

生徒諸子へ

著者より

本書に據つて圖畫を學ぶ生徒諸子は、萬事教師の指導に隨ふべきは勿論であります。尙左の諸點を心得て居てもらひたい。

一、本書は圖畫教科書であつて、臨畫帖即ち畫手本ではありません。無論本書にも生徒諸子が直ちに臨摹すべき手本を挿入して置きましたが、それが本書の總てではない。尙其の他に文部省教授要目の要求する多くの要件を具備させて置きました。それ故挿畫は悉く臨摹すべきものと思ふと大なる間違であります。

二、本書挿入の文章は、諸子が教師より理論と方法との講説を聞いたとき、其の要を摘んだ記事がなくして、領會の助を缺き、又備考の資を得難い譯でありますから、教科書として是非なければならぬ筈のものと信じて、之れを挿入したのであります。

文章の終に挿畫の題目を記してあるのは、之と對照して會得せよとの意味であります。
三、寫生畫・考案畫等を自在に且巧みに作らんに、

畫方・作例等の參考材料を豊富に持つて居る事が肝腎であります。されど本書には紙數に制限がありますから、只骨子・標準となるべきものを載せただけに過ぎません。それ故諸子は日常注意して斯かる參考資料を廣く且多く蒐集する心懸が大切であります。

本書の文章の上欄に挿入した種々なる模様畫、其の他本書の體裁を佳良ならしむる爲めに試みた種々なる意匠等も、よく注意して視て貰ひたい。大に參考の資料とならうと思ひます。

四、本書は圖畫教科書として出來得る限りの注意を製版上に拂ひました。即ち各種製版の長所をそれぞれ適當の方面に發揮せしめた積りであります。諸子はこれに依つて本邦製版術の一般と其の一長一短とを知り、併せて版畫の趣味をも味ふことが出來ようと思ひます。

五、技術教育の大要旨は反復練習といふことであります。諸子は獨り教室内の練習のみを以て満足せず、機會にあらば、畫筆を取ることゝ忘れてはなりません。

訂師範 學校 圖畫教科書

卷の四 目次

第一章 色彩……………一

色彩と感情(色相に伴ふ感情、色彩と明度とに伴ふ感情、色彩使用上の傾向)

挿畫

陸・海

第二章 人物……………七

人(人の身長、人の姿勢、人の表情)

挿畫

人體の割合と姿勢(男子)、人體の割合と姿勢(女子)、男兒、女兒、東郷元帥、婦人、ピスマーク

第三章 景色……………一七

景色の表情

挿畫

雨・雪・風、田面の風、畫の鳥、雨の山

第四章 建築物……………二七

建築と歴史、日本建築(神社佛閣、城廓)、西洋建築

挿畫

日本建築(其の一)、日本建築(其の二)、西洋建築、日本に於ける西洋建築

第五章 圖案……………三五

模様と器物(繪畫模様)、器物圖案(器物の割合、天然物の應用、器物の各部、器物の形状)

挿畫

各種の模様、模様の應用(半襟と裾)、器物の割合、天然物の形の應用、花瓶、器物の各部、家具

第六章 幾何圖……………四九

變格投影圖法

變格投影圖法、變格投影圖法上の規約

製圖上の規約

製圖と彩色法

挿畫

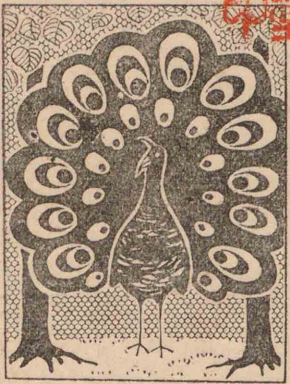
建築材料表示法、器物製圖、建築製圖

(卷の四目次終)

訂師範 學校 圖畫教科書

卷の四

第一章 色彩



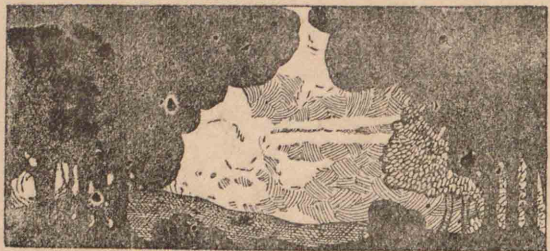
色彩と感情

吾人の眼に映ずる感覺中、快・不快の感を與ふることの最も強きものは色彩なり、故に吾人の日常生活に於て、色彩應用の良果を收めんには、之が感情上に及ぼす影響を考量して取捨せざるべからず。色に對する感情は其の色相と明度とに隨ひて異なるれり。

(1)

色相に伴ふ感情

火は暖かにして赤く、水は冷かにして青きが故に、色彩に於ても亦赤橙黄の如きを見ては



青島大學圖書印



暖かき感をおこし、緑・青の如きを見ては冷かなる感をおこす。此の理によりて前者を暖色と稱し、後者を寒色といふ。(陸海)

心理學者は色相に伴ふ感情を更に細別して左の如く説けり。各自は之を基礎とし、且實驗に訴へて、色相に伴へる自己の感情を驗せよ。

- 一、赤 興奮性にして勢力の感情を伴ふ。動物或は野蠻人等は此の色彩によりて興奮すること甚しきものあり。
- 二、黄 稍興奮的にして暖かなる感情を伴ふ。
- 三、青 沈靜にして冷かなる感情を伴ふ。
- 四、緑 青と黄との中間に位して、平穩なる喜樂の感情を伴ふ。故に此の色彩は外界の色としては適當なるものとす。
- 五、紫 赤と青との中間に位して、平安なる興奮と陰鬱なる眞面目との混合したる感情を伴ふ。

明度に伴ふ感情 明度に伴ふ感情に關しては、心理學

者は更に左の如く説けり。

- 一、白 快活或は喜樂の感情を伴ふ。
- 二、黒 眞面目或は嚴肅の感情を伴ふ。
- 三、灰 右の中間に位する感情を伴ふ。

色相と明度とに伴ふ感情 色相と明度との混合によりては、例へば赤が明色となれば興奮的喜樂の感情に近づき、暗色となれば嚴肅なる勢力の感情となるが如く、其の變化複雑なれば一々説明すること能はず。各自の經驗と實驗とに徴して判斷すべし。

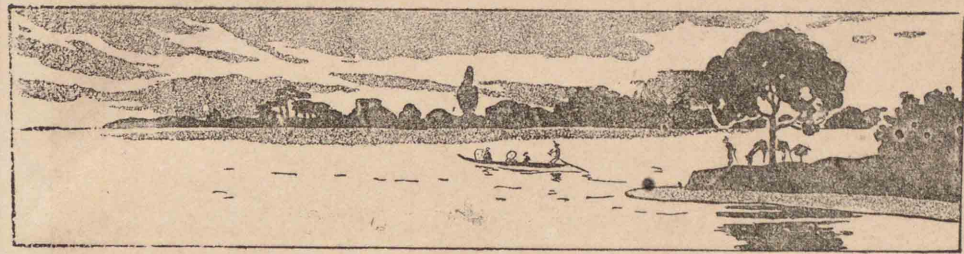
要するに、人の感情は人々によりて區々なるが故に、其の結果必ずしも劃一ならず。故に學者の説を基礎とし、各自之を實驗するを以て最も適切なる攻究の方法とす。

色彩使用上の傾向 上述の如く色は人の感情上に影響



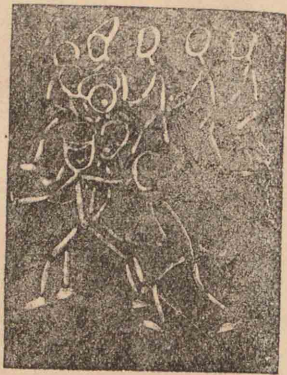


海・陸



を及ぼすこと大なるが故に、畫家は色彩の配合に種々の苦心を重ね、従來物の暗部を黒味勝ちにしたりし習慣を排し、他の適當なる色を以て之れを解釋せんとする新色彩派を出すに至れり。故に近代の畫は其の色彩上に於て著しく、快潤・緩和の感を帯び來たれり。

手燭して色失へる黃菊哉 (蕪村)



第二章 人物

人の全身には姿勢と表情と言ふべからざる妙趣を具ふ。随つて其の攻究は最も興味あり。之を實習するには先づ身長割合を知り、後其の姿勢と表情との研究に進まざるべからず。

人の身長

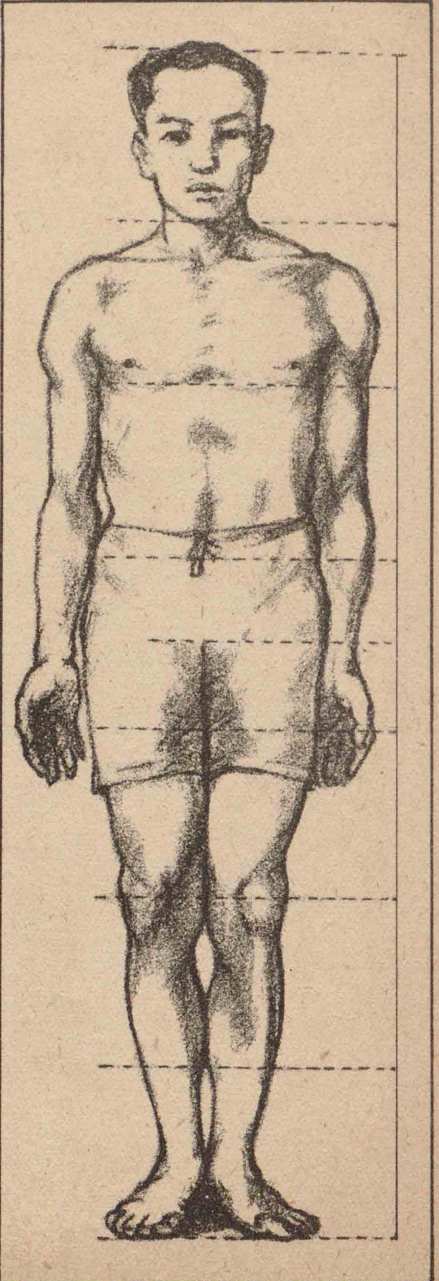
人の身長は頭の長さを単位として測定するを普通とす。嬰兒は其の身長頭の凡四倍にして、それより漸次發育して大人となれば、日本人は男子凡七倍、女子凡六倍半の割合に達し、西洋人は七倍半乃至八倍の割合に達す。(人體の割合と姿勢(男子(女子)))

奮勵努力

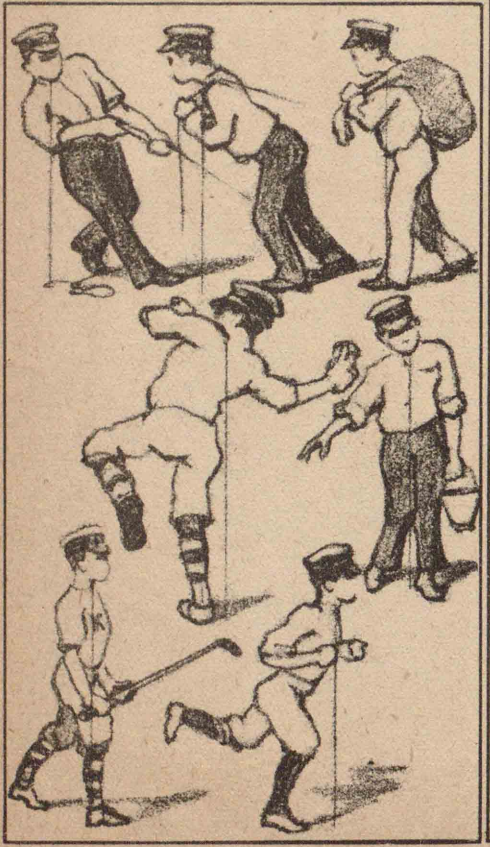
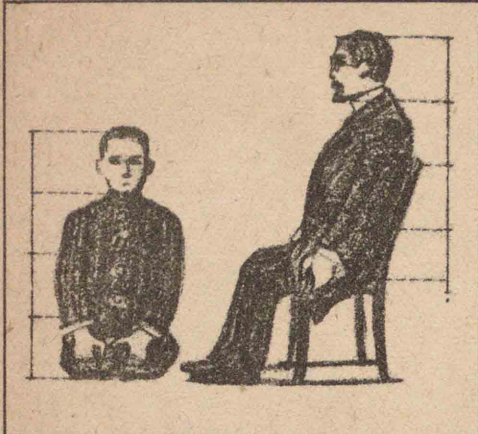
平島 孝

人の姿勢^{△△△} 活動せる人の姿勢を畫くに當りては、頸より錘を垂れたるものと假定して、其の錘の移動によりて頭部と脚部との釣合を定むるを可とす。其の垂直線の位置は、挿畫に示せる如く、直立せる姿勢にありては兩脚の間に來たり、傾斜せる時は或は隻脚の中に来たり、或は兩脚を外るゝことあり。(人體の割合と姿勢(男子)(女子)人の表情^{△△△} 小兒の挿畫に於て、瞬間の姿と表情とが如何に表はされたるかを攻究し、諸般の場合に於て此の練習を試みよ。(男兒)(女兒)

東郷司令官の信號
皇國の興廢此の一戰にあり。
各員一層奮勵努力せよ。

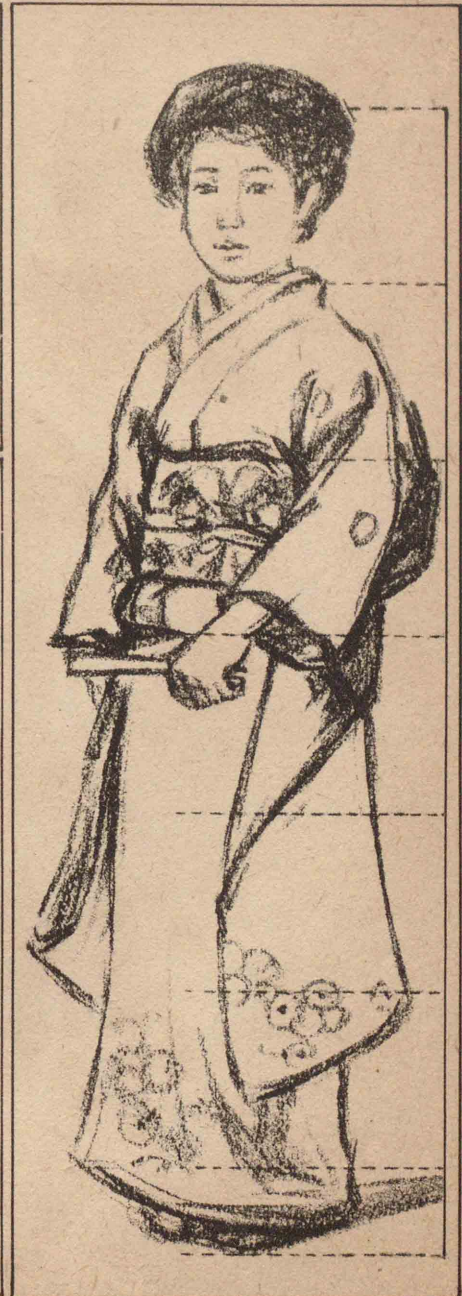
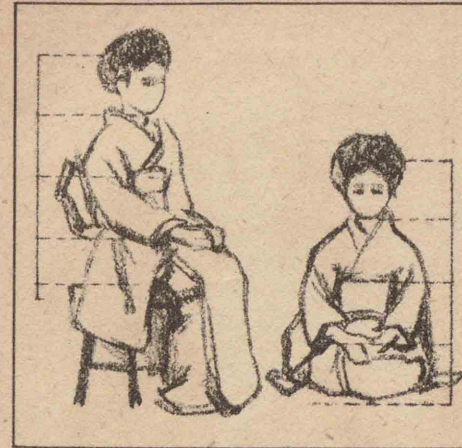


(男子) 人體の割合と姿勢





兒男



(子女) 勢姿と合割の體人



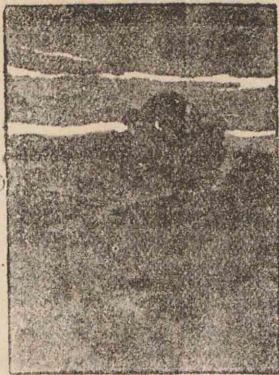
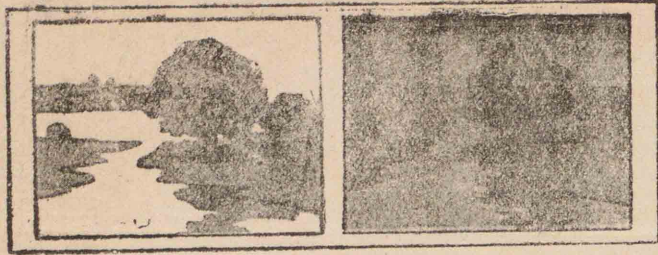
將大郷東



兒女



クーマスビ



景色の表情

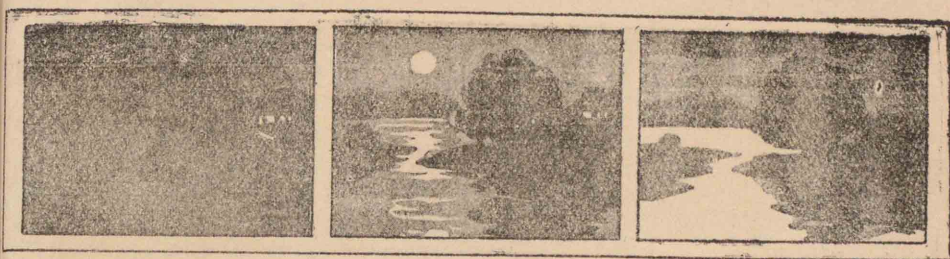
第三章 景色

人に喜・怒・哀・樂の表情あるが如く、景色にも、亦
 春・夏・秋・冬に於て、雨・風・雪に於て、將又月と太陽
 との光に於て、諸種の表情あり。日中の光、薄暮の色、月夜
 の趣、皆是時々刻々に變化しつゝある景色の表情に外
 ならず。此の景色の表情を筆紙の上に表はすは、景色畫
 中の最も難事なり。然れども之が攻究は最も興味に富
 む。

畫を學ぶもの景色畫に於て其の形狀・色彩を寫すと
 同時に其の表情を畫き得るに至らば、こゝに始めて畫



風・雪・雨



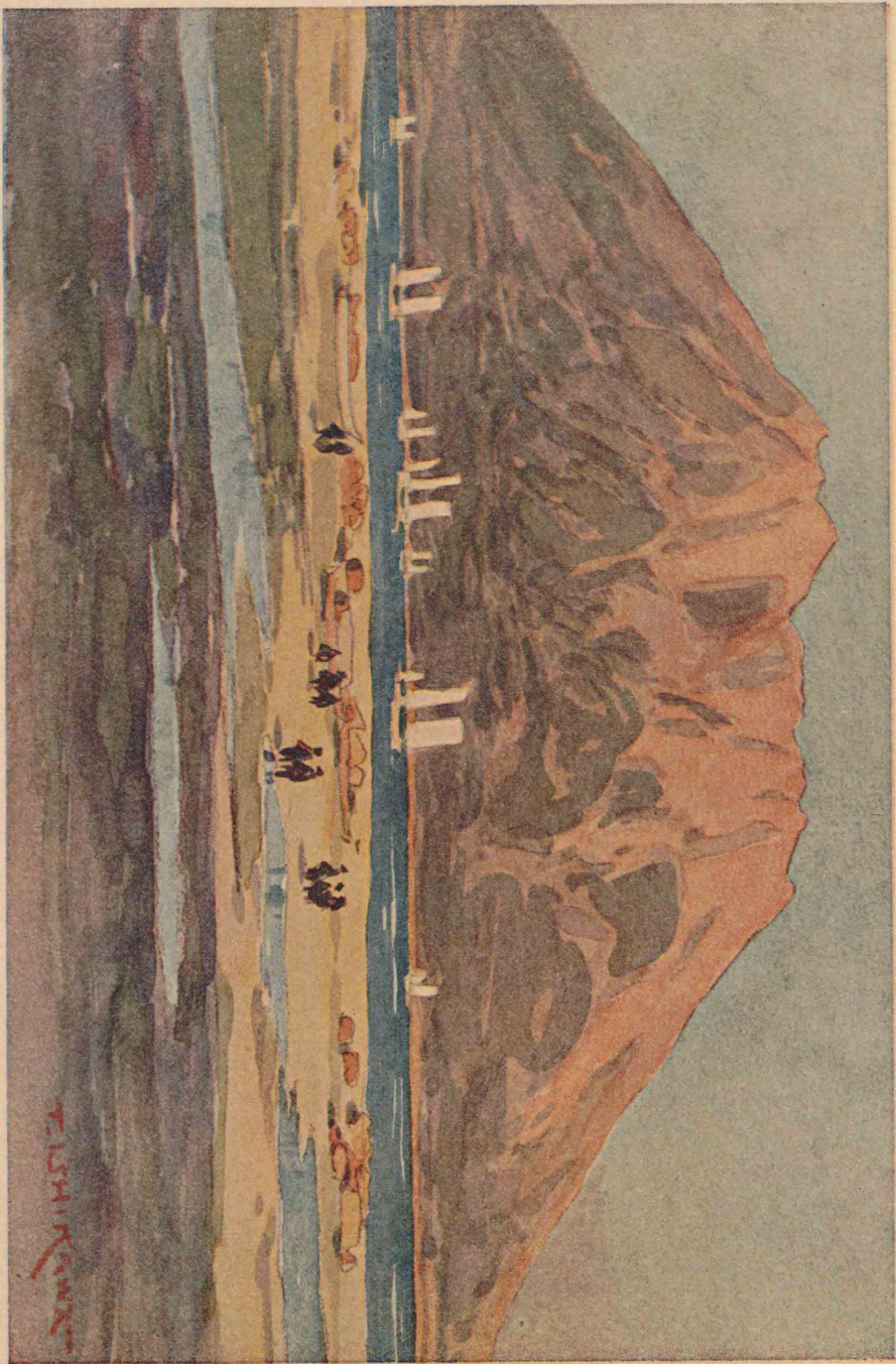
事を覺り、興味は其の頂點に達すべし。こゝに至るには、
 一に精確にして敏活なる觀察力の基礎に依らざるべ
 からず。各自挿畫に就いて、雨・雪・風の具へたる形狀・色彩
 と表情との關係を攻究し、更に進んで「畫の島」「雨の山」に
 如何なる表情あるかを究め、然る後之が練習を試みよ。

(雨・雪・風) (田面の風) (畫の島) (雨の山)

くもの降いくつ崩れて月の山 (ばせを)

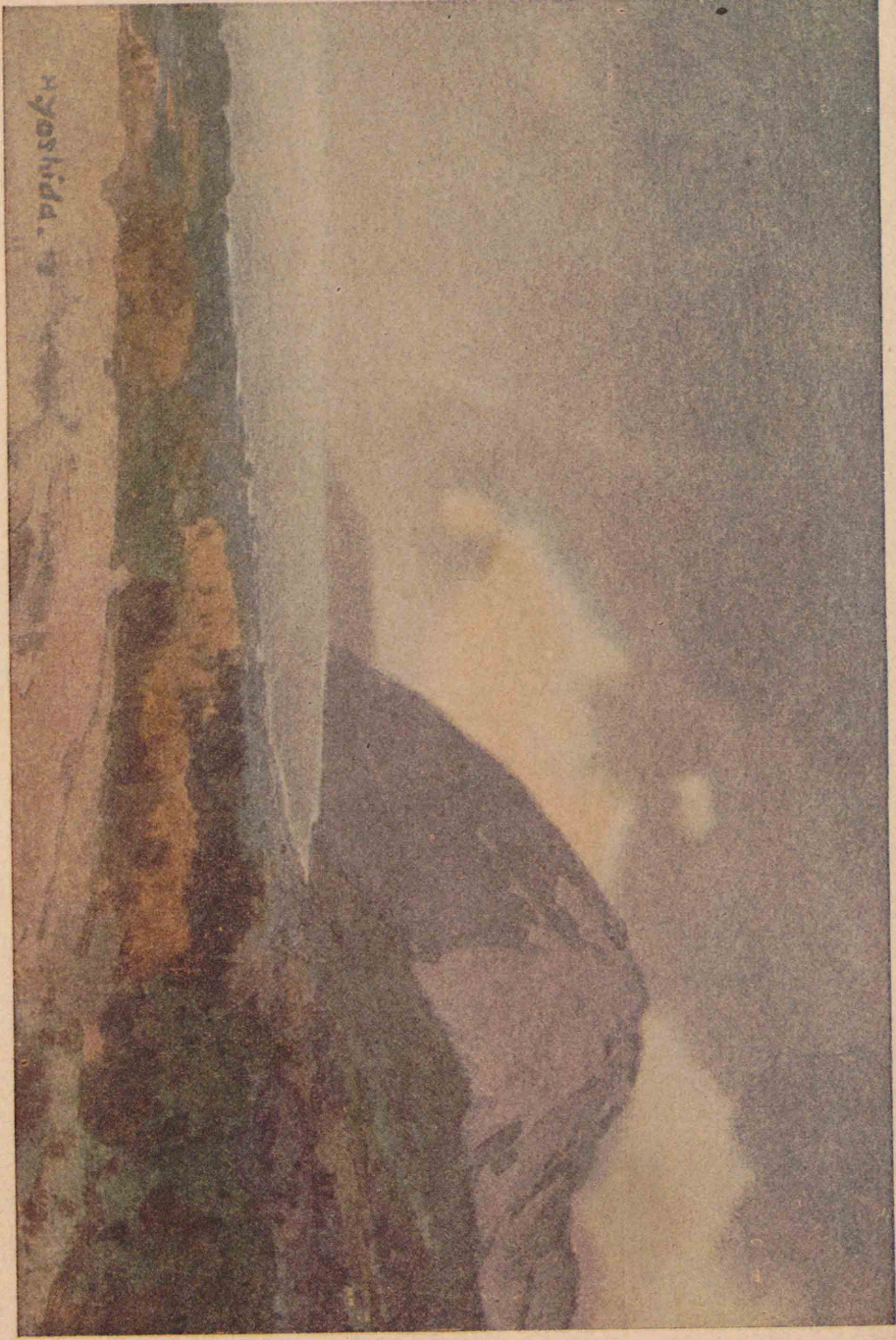


風 の 面 山



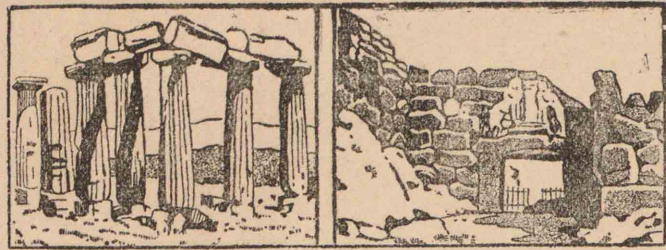
富士山

島の景



Hyoshida.

山 〇 陣



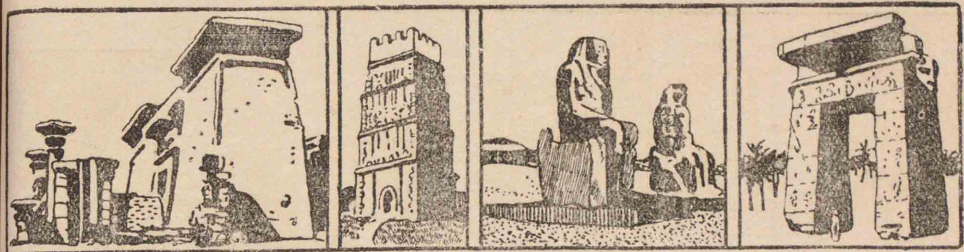
第四章 建築物

建築と
歴史

家屋が吾人の生活上衣食と共に大切なるものゝ一なることは、既に説明したり。更に其の構造を歴史的に攻究するは亦興味ある問題なり。

日本
建築

我邦の建築物は、(一)實用を主としたる住宅と、(二)崇敬と信仰とより築き上げたる神社・佛閣と、(三)武將が示威と防備との目的を以て建築せる城廓との三方面に發達し來たれるを見る。其の結構の壯麗なる點に於て、又今日猶現存して往時の倂を窺ひ得べき點に於て、神社・佛閣と城廓とは、我邦美術建築の主な



るものなれば、左に一二の例を挙げん。

神社佛閣 神社の古式に三種あり。(一)大社造(二)住吉造(三)神明造と稱す。此の様式は佛教の傳來に因りて其の影響を受け、支那趣味を加へたる結果、(四)春日造(五)流れ造となれり。更に神佛融和の結果として現はれたるものに、(六)八幡造(七)伽藍造(八)權現造(九)八ッ棟造等あり。

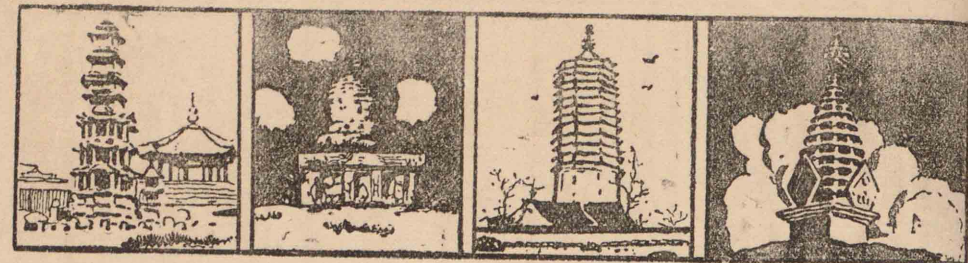
佛閣の中にて古式を其の儘遺せるものは、大和の法隆寺なり。法隆寺金堂は實に千有餘年前の遺物にして、史上に所謂推古式建築の模範なり。此の他猶當摩寺東塔・東大寺法華堂・海龍王寺西金堂・榮山寺八角堂・法隆寺食堂・夢殿・新薬師寺本堂・唐招提寺金堂・同講堂等あり。平安奠都以後に於ては、延暦寺・金剛寺・清水寺・西寺・東寺・鞍馬寺・觀心寺・興觀寺・元慶寺・仁和寺等あり。此の如く佛閣は古より各地に建立せられ、今尙各郷土に偉觀を呈す。

以上の一例を示さんがために挿入せる圖の内容は

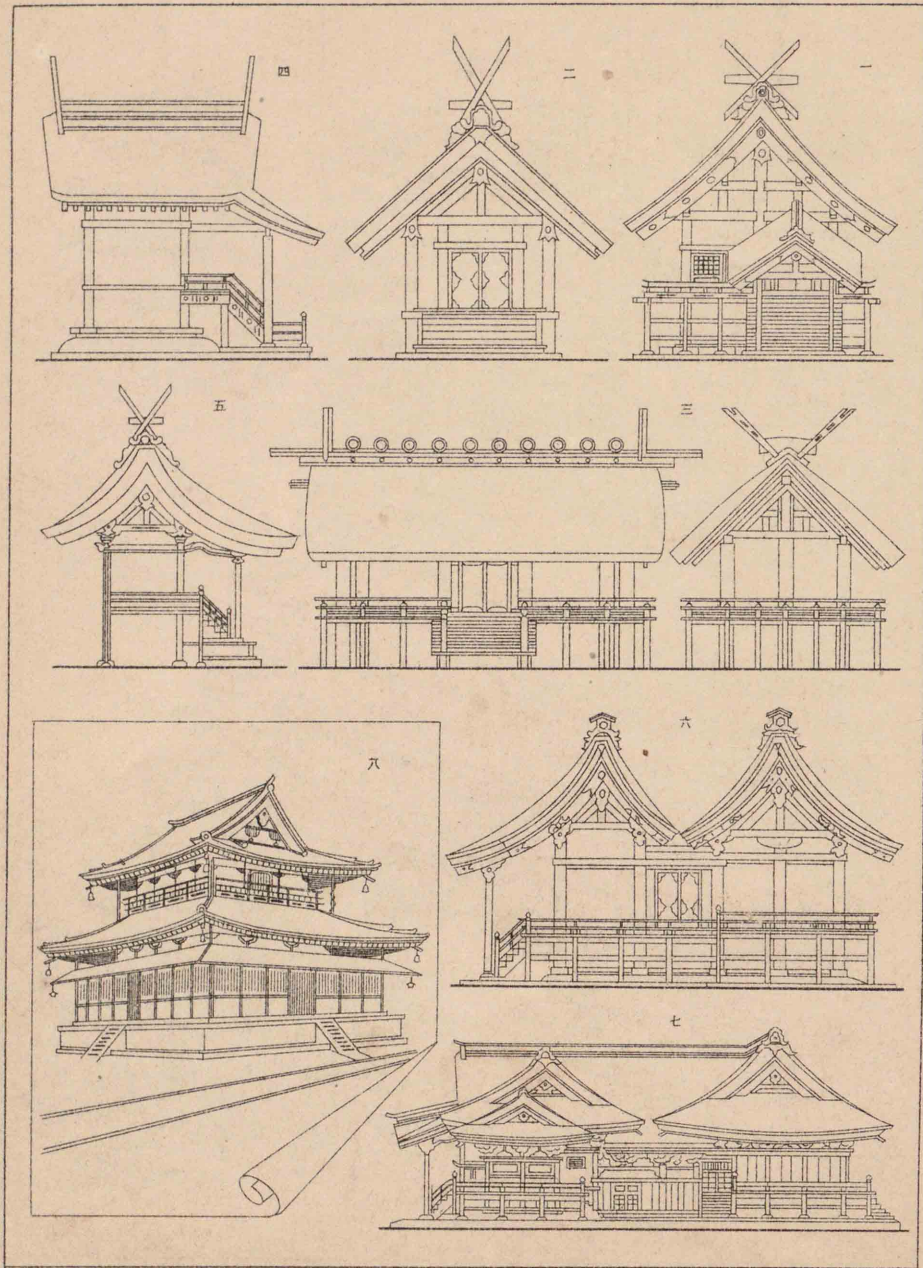
左の如し。(日本建築(其の二))

神社佛閣建築様式の名稱

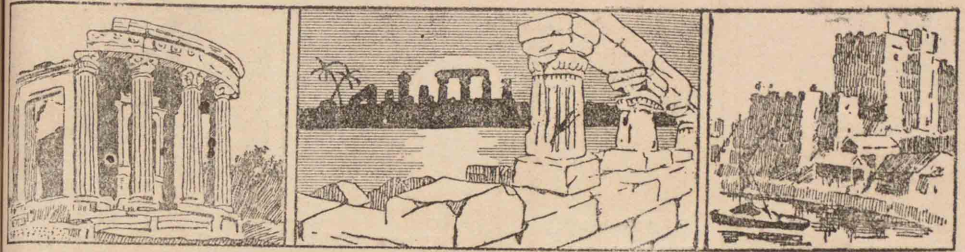
一、大社造	出雲大社	五、流れ造	山城加茂社上下
二、住吉造	攝津住吉神社	六、八幡造	豊前宇佐八幡宮
三、神明造	伊勢大廟	七、八ッ棟造	山城北野天神
四、春日造	奈良春日社	八、金堂	大和法隆寺



城廊 城廓の猶今日に存するものにて著名なるものは、豊臣氏の大坂城・徳川氏の江戸城・二條城・伊達政宗の仙臺城・加藤清正の熊本城・尾張大納言光友の名古屋城・毛利輝元の廣島城・池田輝政の姫路城等にして、本邦城廓の全盛期のものなり。之を佛閣の堂塔と比較して、其の趣味の異なる處を攻究せよ。(日本建築(其の二))



(一の其) 築建本日



堂・塔及び城の名稱

五重塔
八角堂
多寶塔

法隆寺西院内

榮山寺

高野山

姫路城

西洋建築

西洋の建築も亦時代により邦によりて各種の風を爲す。古きものに埃及建築あり、アッシリア建築、波斯建築、希臘建築、羅馬建築等より、ローマネスク建築、ゴシック建築、クラシック建築等を経て近世式となれり。挿畫は其の中主なるもの、數例を選び、其の特徴の一般を窺ふの資料とせり。(西洋建築)

西洋建築の名稱

埃及建築

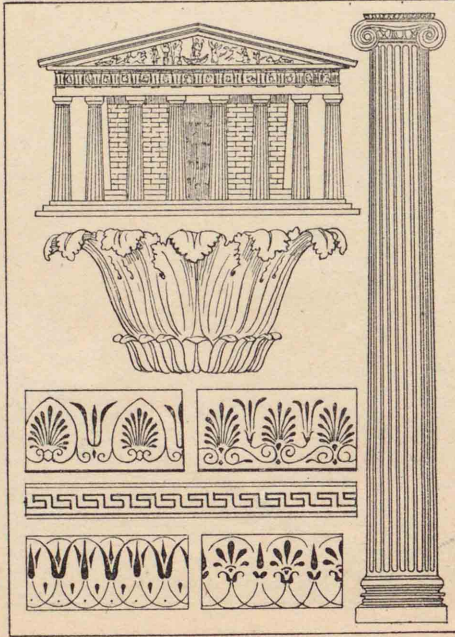
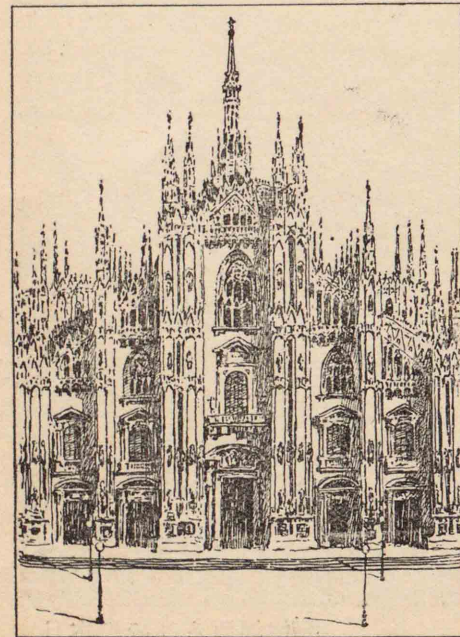
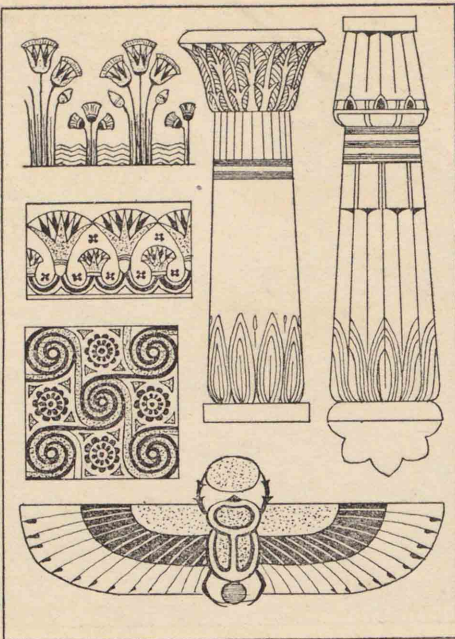
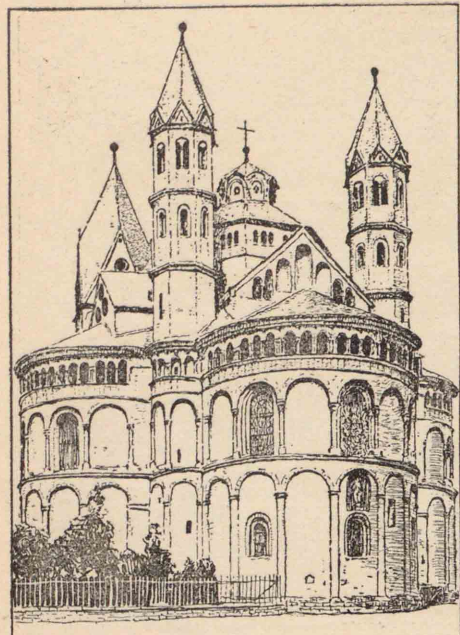
希臘建築

ローマネスク建築

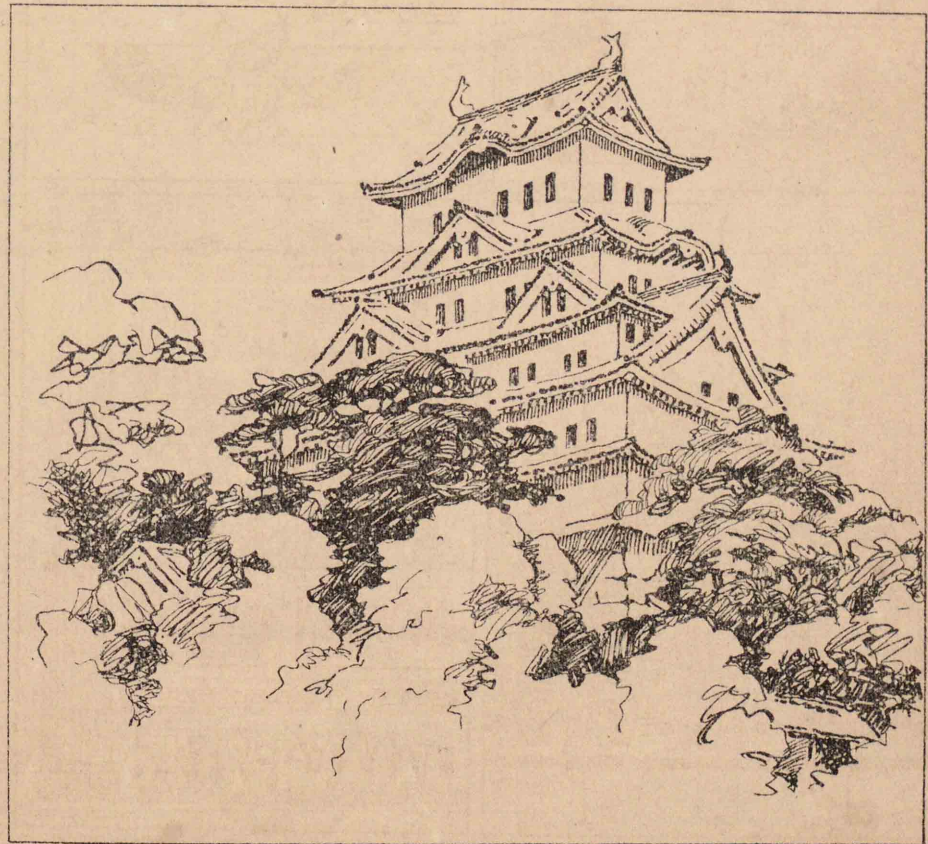
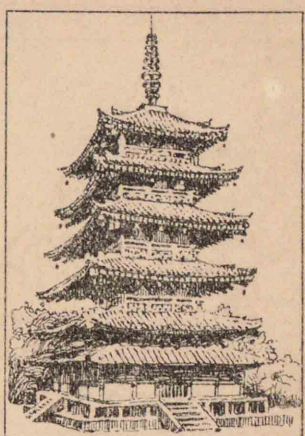
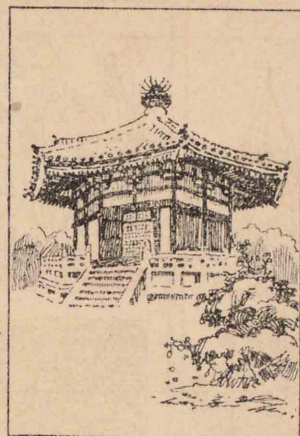
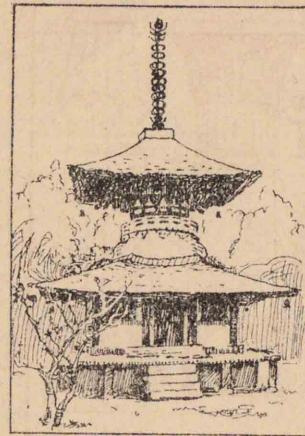
ゴシック建築

ニコライ教會堂 東京駿河臺

表慶館 東京帝室博物館内



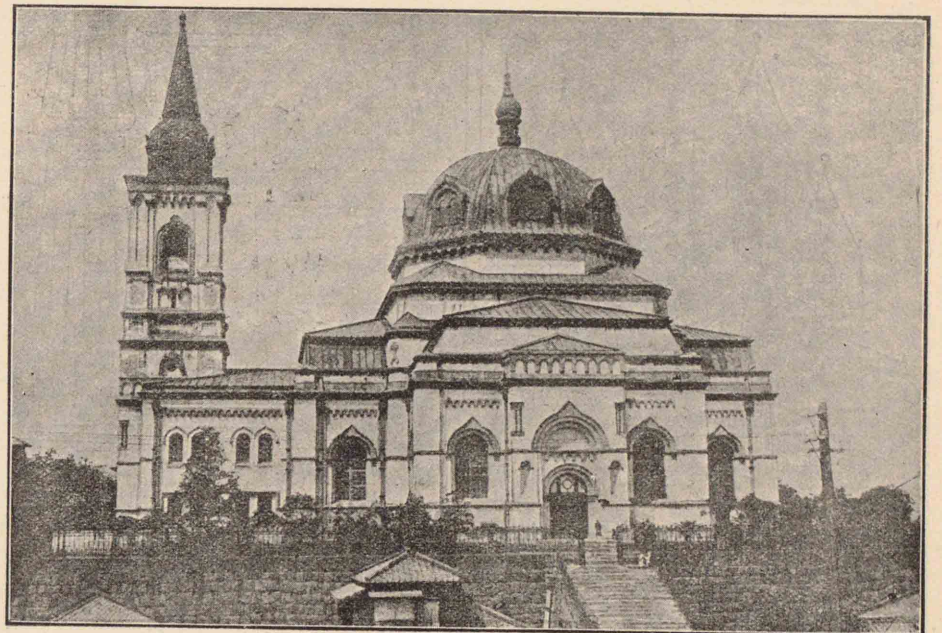
築建洋西



(二の其) 築建本日



第五章 圖案



日本に於ける西洋建築

模様と
器物

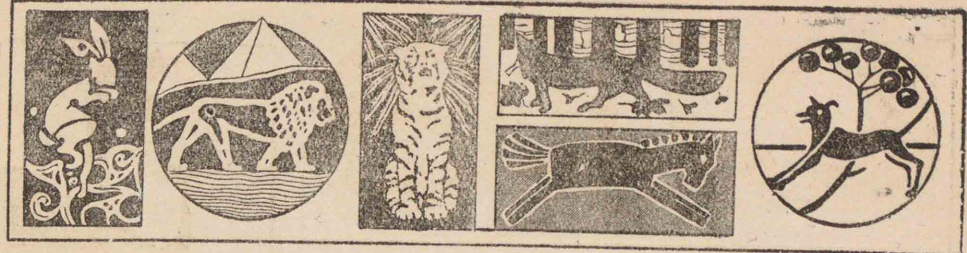
本章に於ては、繪畫模様及び器物に就いて其の意匠を攻究せんが爲に、各種の比較材料を掲げて、其の作法の如何に自由なるかを示さんとす。

△△△
繪畫模様 △△△
繪畫模様の一例(挿畫繪畫模様と其の應用)

は既に前卷に示したり。更に本章の挿畫に就いて、其の意匠の自由なることを攻究せよ。(各種の模様)

器物
圖案

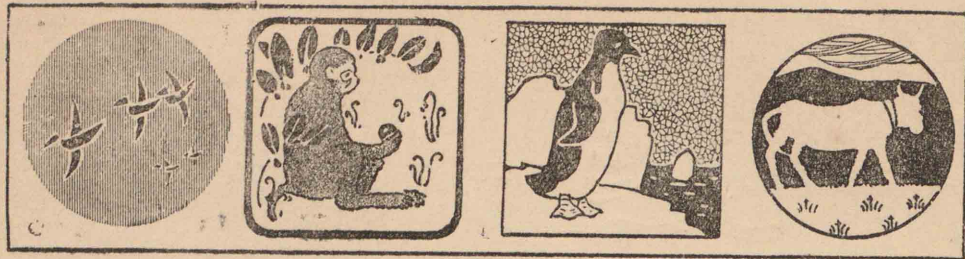
立體圖案として其の一部金具の攻究を前卷に示したるが故に、本章に於ては器物の形狀に就いて一二の事項を説くべし。



器物の割合 器物は其の用途と其の形状の美とに就いて適當の考慮を要す。其の各部の割合には二部分より成るものと、三部分より成るものと、此の他尙多くの部分より成るものとあり。是等は何れも其の各部の等分を避けて、挿畫に示す如く、一と二、二と三、或は二と三と一、三と二と一等の如く、其の面積に差別をつくるを良とす。然れども、其の高さ極めて低きものには、二等分法を用ふることありといへども、此の如きは特別の場合なり。(器物の割合)

天然物の應用

器物に直線的と曲線的との形状あり、(一)直線的のものは其の形の變化極めて單純なれども、(二)曲線的のものは變化多くして、其の形状を定むること困難なり。故に色の配合に於て自然物の配色を採集せるが如く、器物の曲線的形狀に於ても自然物により



て其の形の基礎を定め、或は自然物の一部分の曲線を利用して其の形状を作成することあり。挿畫に就いて其の一般を窺ひ知るべし。(天然物の形の應用)(花瓶)

器物の各部 器物は吾人が生活上必須のものにして、常に坐右に備ふるものなれば、之が各部の名稱と形とを熟知して、其の選定上或は考案上に之を應用せんことを要す。挿畫に於ける各部の名稱左の如し。

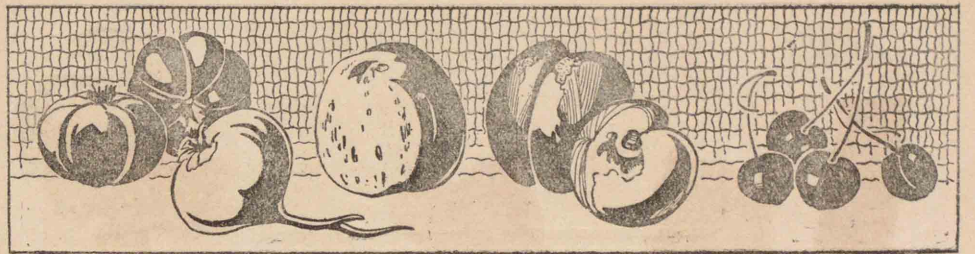
(器物の各部)

器物各部の名稱

(甲)面取	(乙)組手	(丁)耳	(戊)手掛	(己)脚
一、糸面 二、平面 三、圓面 四、凹面	一、手組(石疊) 二、天秤組	錫杖耳 大角豆耳 象耳 龍耳	火鉢・煙草盆 等の如く兩手にて持つ器物	こは臺卓等に用ふる各種の脚なり。



各種の様模



器物の形状 器物の全形として家具圖一圖を挿入せり。之に依りて其の形状を比較し以て、日本人と西洋人との趣味の相異を攻究せよ。(家具)

家具

(日本式) 幸阿彌長重作 初音蒔繪棚並びに飾道具の内の一
(西洋式) 西洋書齋用卓

五、几帳面
六、几帳面
七、唐戸面
八、匙面

一、包込帯
二、二枚帯

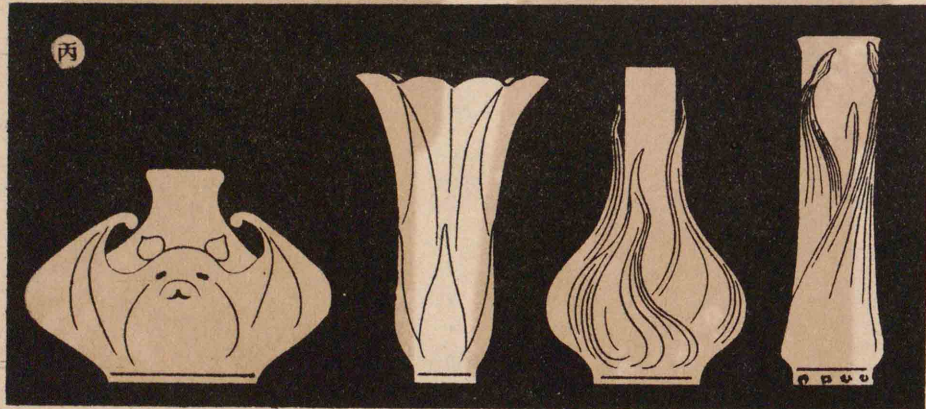
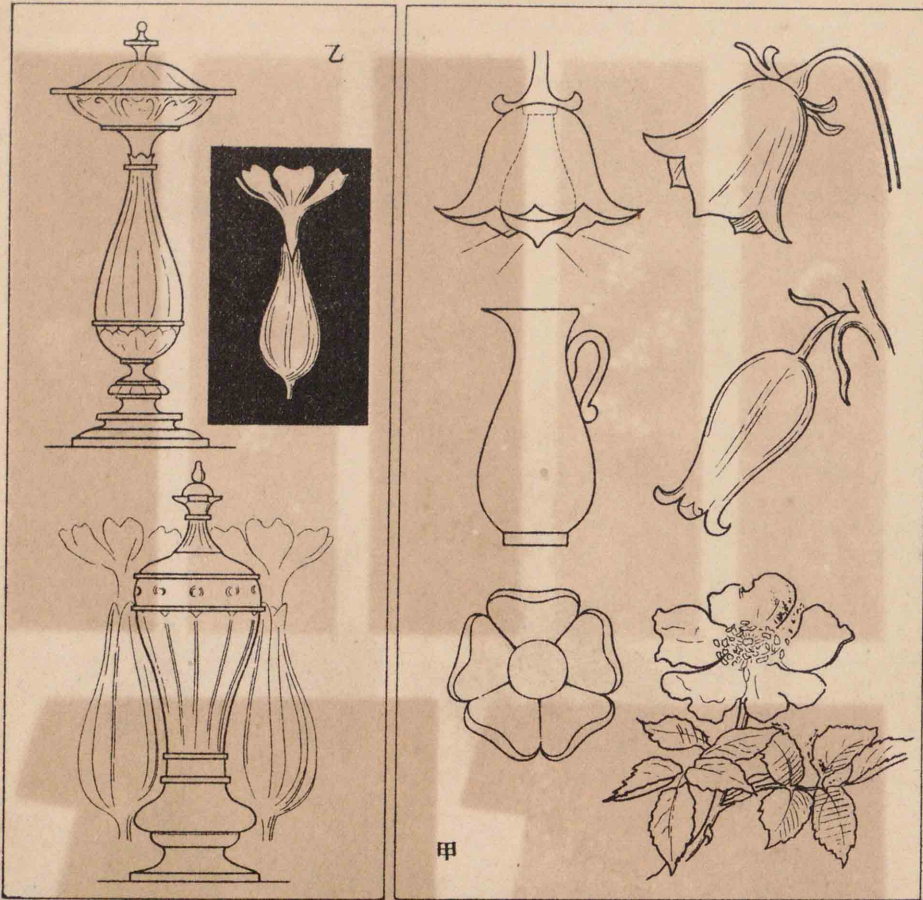
猿耳
鬼眼
鳥耳
蝶耳
雲耳

の側面に用ふ
ふものなり。

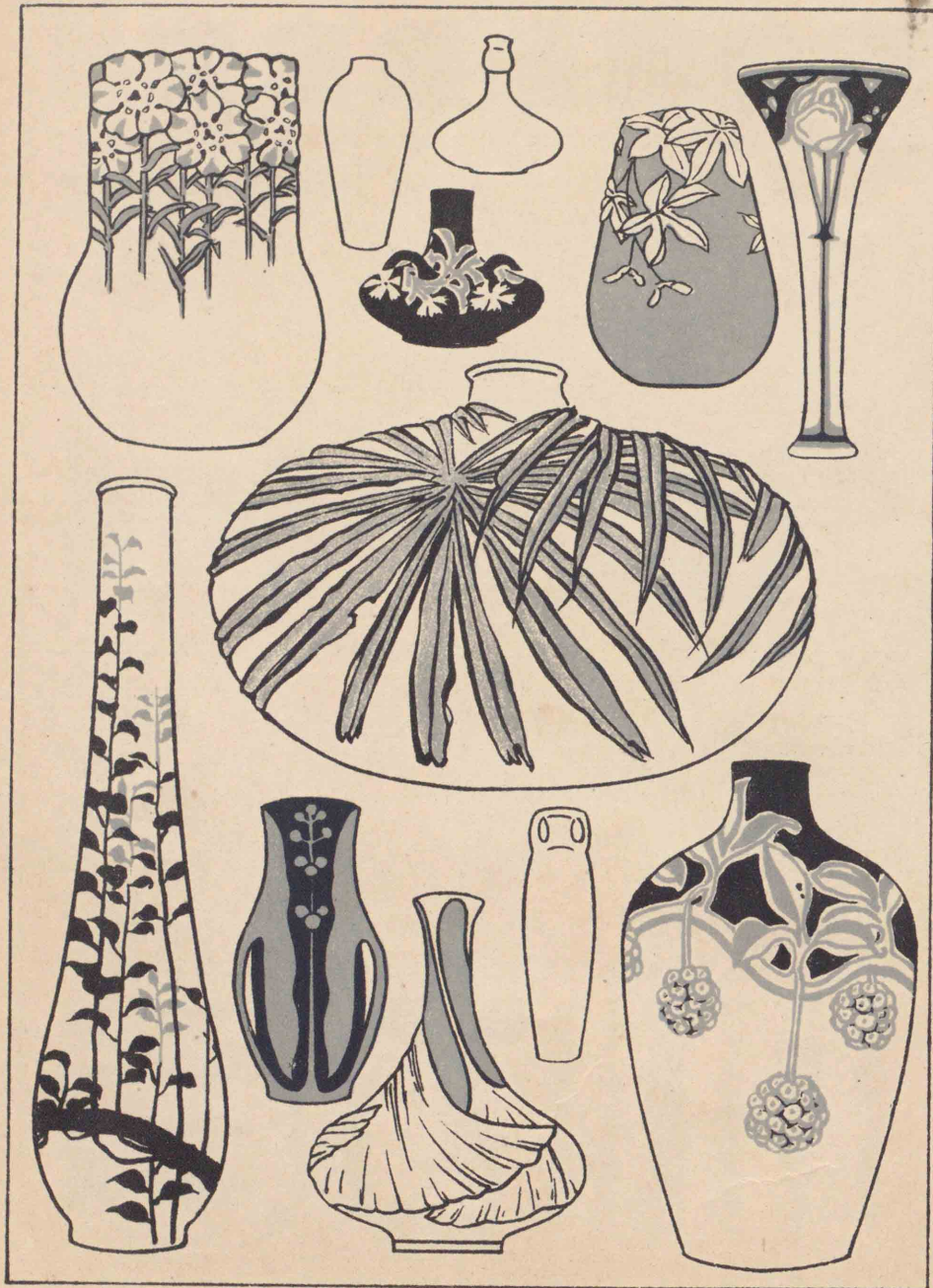


(裾と襟半) 用應の様模

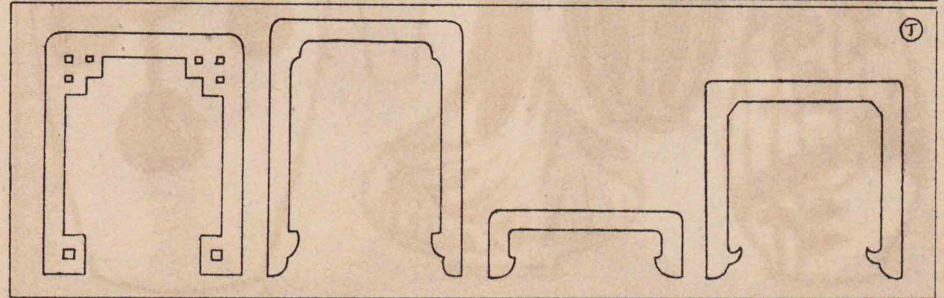
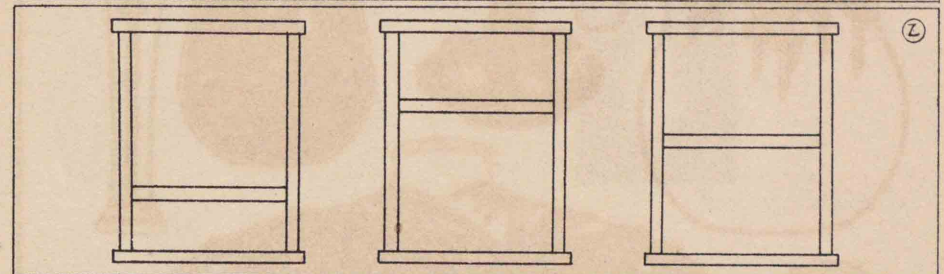
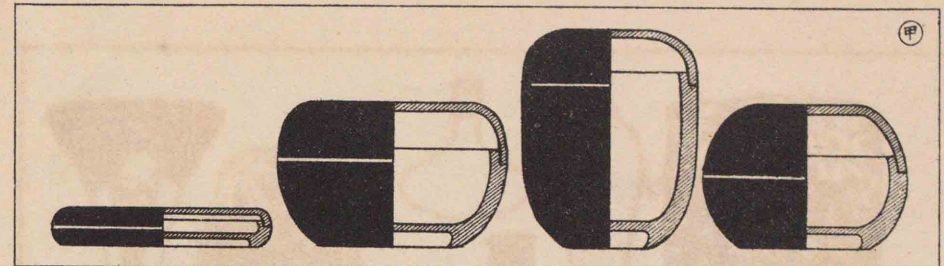




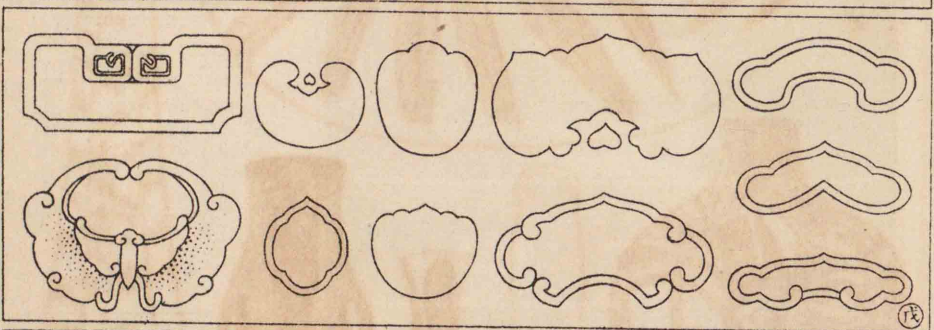
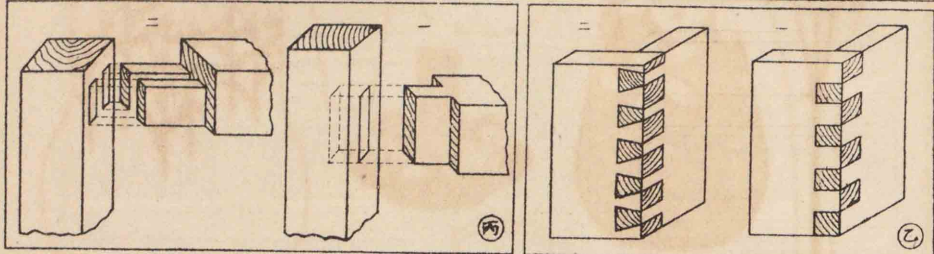
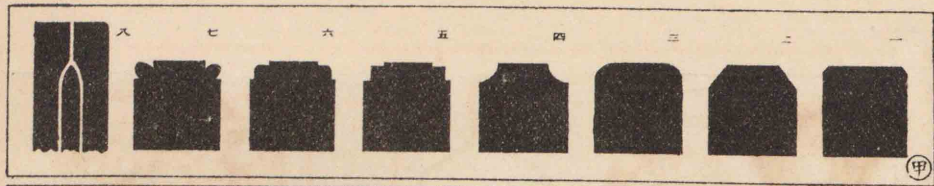
天然物之形應用



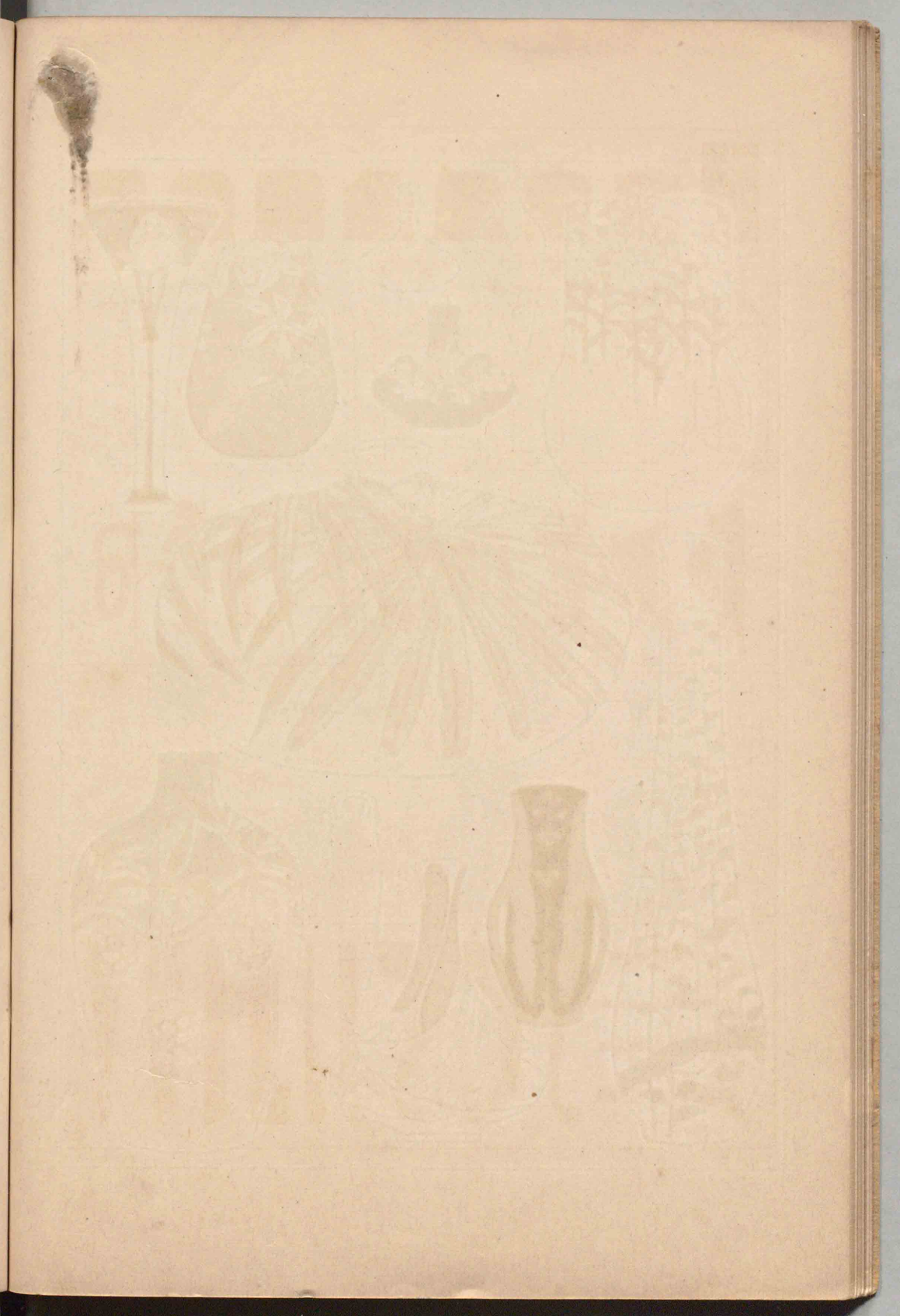
瓶 花



合割の物器

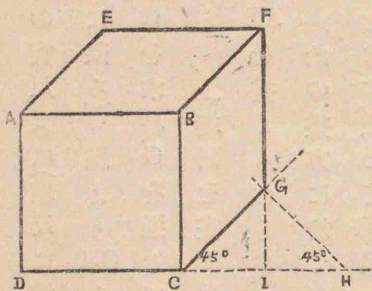


部各の物器



變格投影
圖法

變格投影
圖法上の
規約



第六章 幾何圖

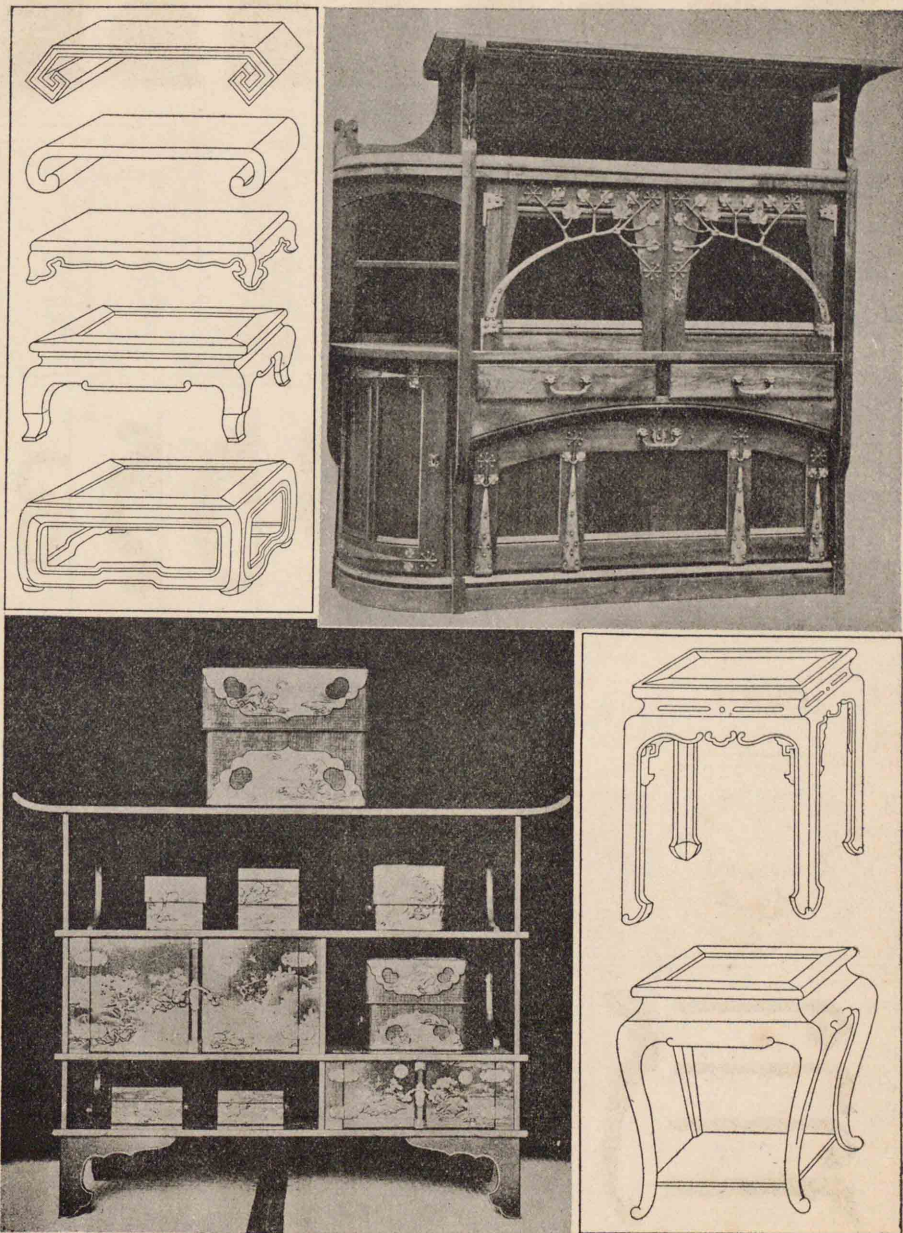
變格投影圖法

變格投
影圖法

日常使用せる工作圖及び説明圖にして、純然たる
投影圖法の法則によらず、又純然たる透視圖法の
法則にも従はず、恰も平行透視圖法にて畫きたるが如くに
して、透視圖法の如く遠近の區別をなき、一種の圖法あ
り。之は工作圖法として又説明圖法として便なる圖法なれ
ば、之を變格投影圖法と名づけて左に説明すべし。

變格投
影圖法上の
規約

此の圖法に於ては、其の正面圖は實尺
又は縮尺にて其の實形を表はし、側圖
と上端面との面は、平行透視圖の圖形の如く、實形
と異なりたる形にて表はすものとす。之を畫くに
は、上圖立方體の如く、先づ正面圖 ABCD の實形を實尺
又は縮尺にて畫き、次に側面圖を畫く。側面圖を畫
くには DC 邊を左若しくは右側方に延長して CH を



家具

作り、之に α 度の角をなすCGなる直線を引き、次に與へられたる側面の奥行の實尺又は縮尺に等しく、縮尺を用ふる場合は正面を縮尺にて畫きたる時に限る)U點よりCHを取り、H點よりCGに垂直にHG線を畫きCGとHGとの交點Gを求め、Gを通じてBCに平行にFGを、Bを通じてCGに平行にBFを畫くものとす。上端面を畫くには、Fを通じてABに平行にFEを、Aを通じてBFに平行にAEを畫くものとす。

此の畫方に於てGCH角が四十五度なる時は、GCH三角形は常に二等邊三角形をなす。依つてFG線を延長する時は、CGHなる二等邊三角形の底邊CHの中點Iに於て相會す。故に此の圖法にて畫きたる圖の側面のBCとFGとの稜の距離は、實尺又縮尺に作りたるCHの二分の一に相當することを知るべし。依つて此の畫方に於てはCGに垂直なるHG線を設け、G點を求めてGF線を畫く代りに、直にOBとGFとの平行線の距離を、與へられたる側面の長さの二分の一の距離にとりて、FG線を畫くも可なり。

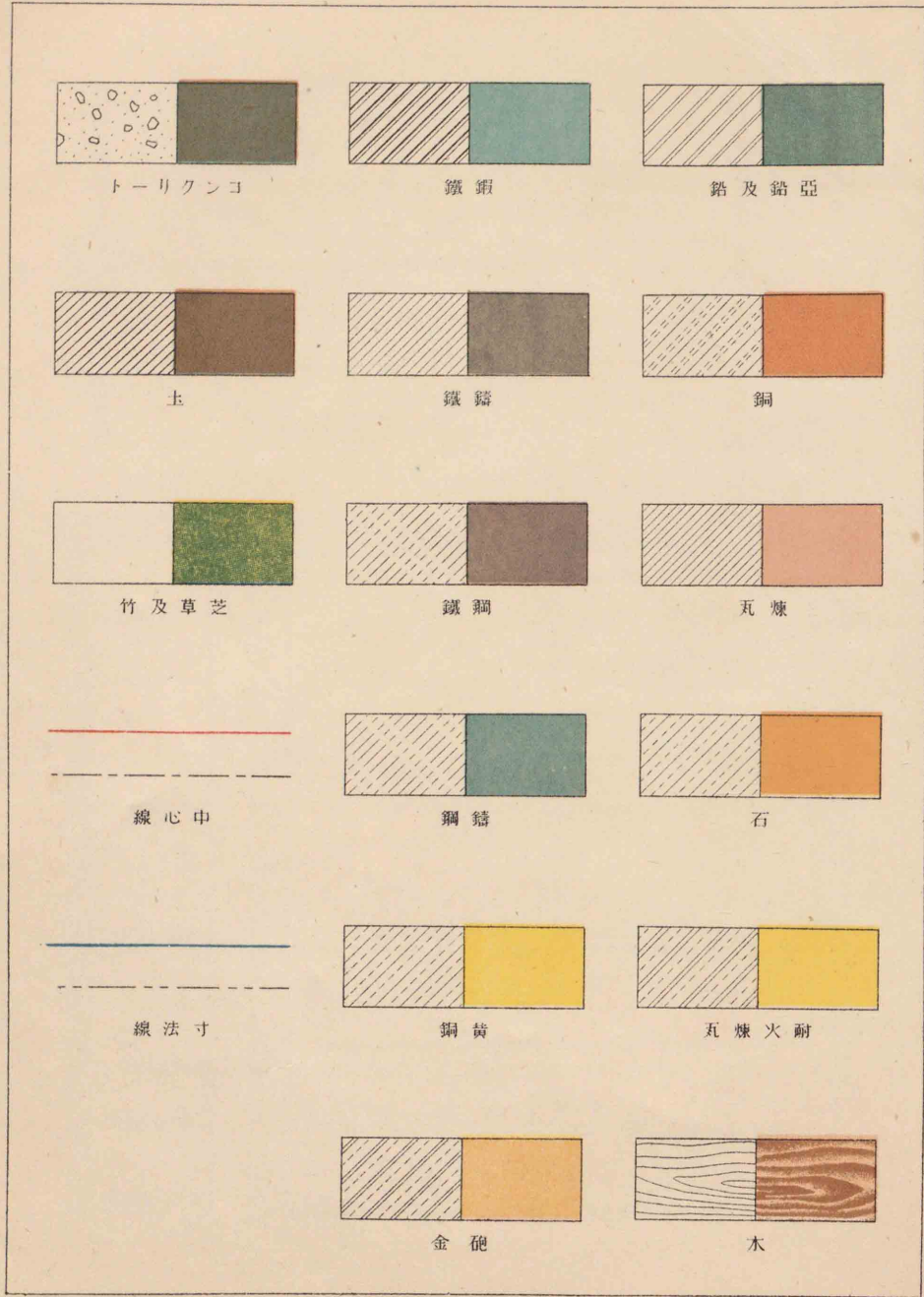
此の圖法は方眼野の紙に畫く時は、極めて簡便迅速に畫き得べし。

製圖上の規約

製圖と
彩色法

製圖は用材によりて色彩を異にするを通則とす。其の色は工場によりて多少異なることあれども、略、共通なり。本章に示したる建築材料表示法は、明治三十三年日本工學會にて定めたるものなり。表中色と對照したる斜線は、切斷面に用ふる符號なり。表中に同色及び同種の斜線あるは、同じ符號にて表はすも、當然誤解なきものと思はるゝものを合せて同符號としたるものなり。

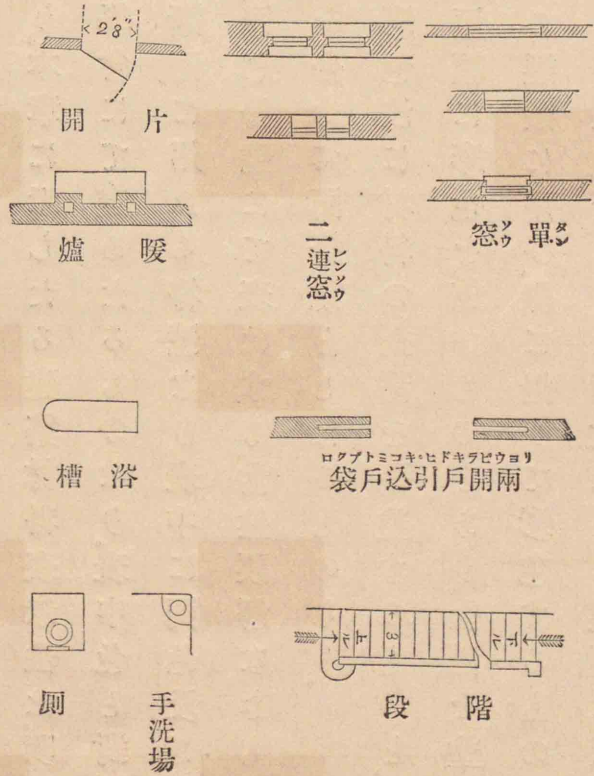
製圖の彩色法に材料の全部を平塗するものと、線に沿うて凡六七厘幅に彩色を施すものとあり。全部を塗るものは縮小したる製圖に用ひ、線に沿うて彩色するものは縮圖の大なるもの實尺圖若しくは廓大したる製圖に用ふ。挿畫の例に倣ひて器物又は建築物の看取製圖をなして、之に彩色を施すことを試みよ。(建築材料表示法)(器物製圖)(建築製圖)

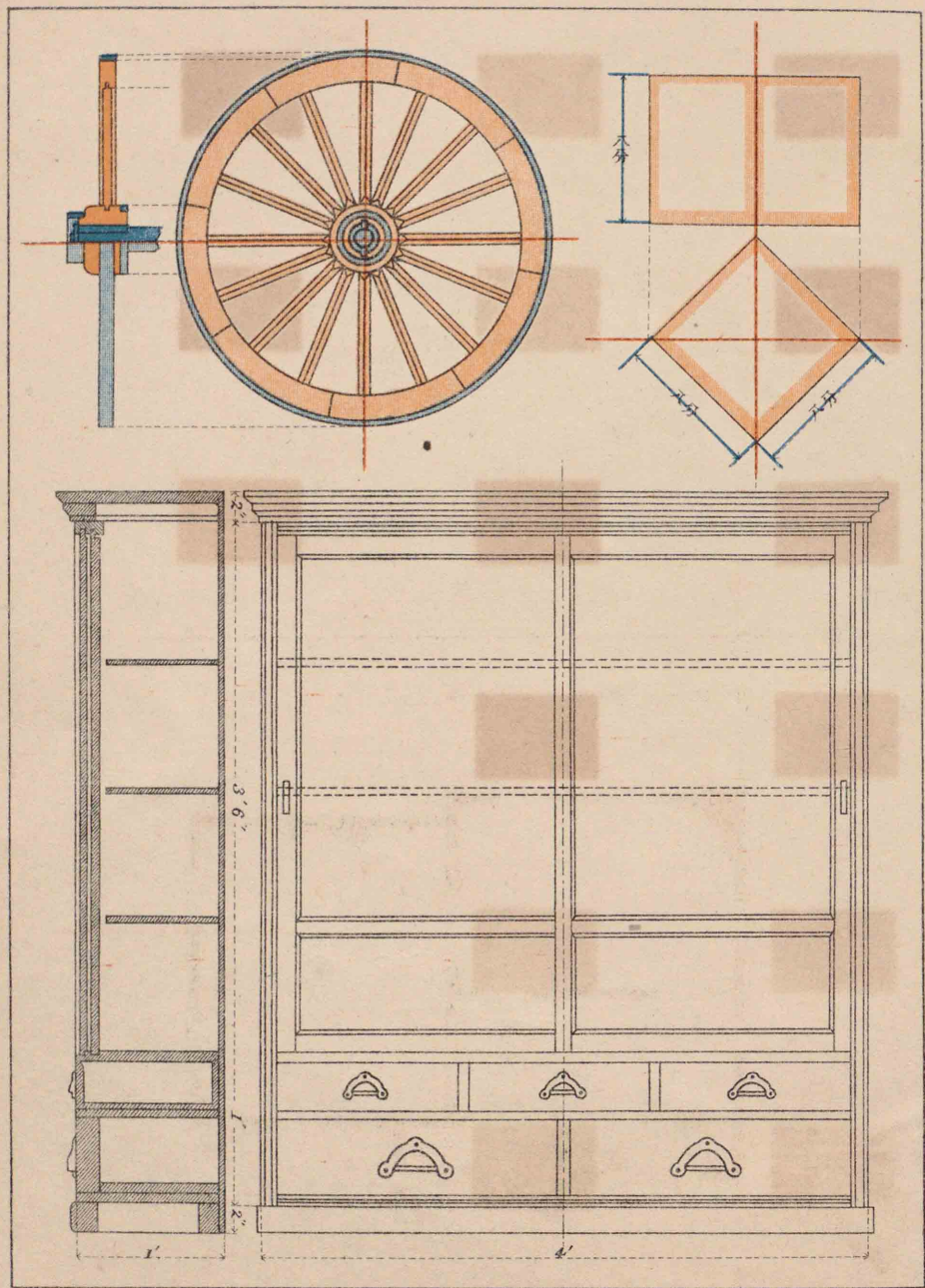


法示表料材築建



號符圖製築建流洋西





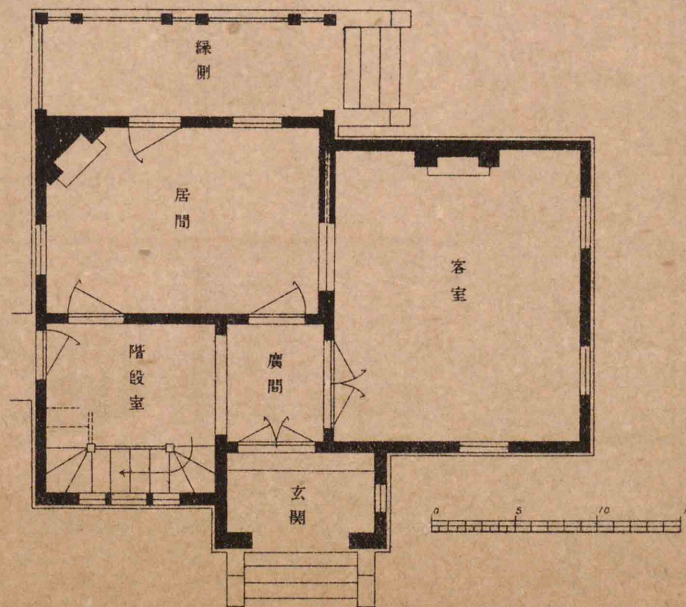
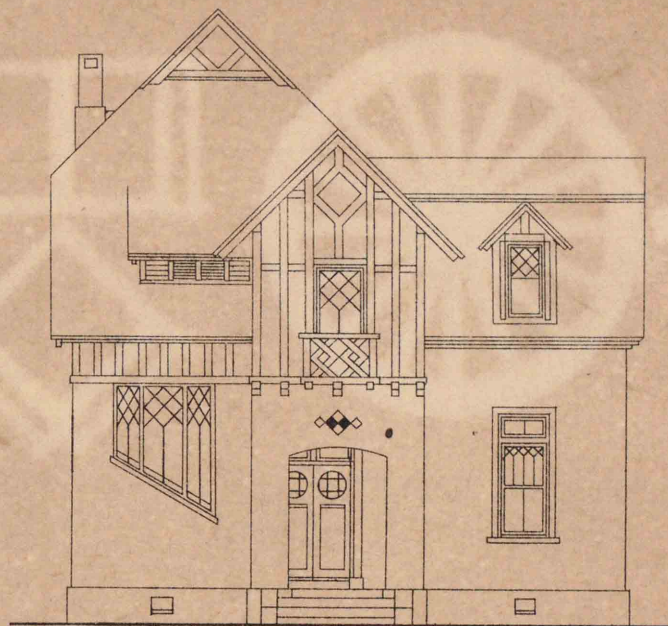
圖製物器

大正元年年十月十一日
 大正六年六月二十七日
 大正七年五月十七日
 大正八年五月十七日
 大正九年五月十七日
 大正十年五月十七日
 大正十一年五月十七日
 大正十二年五月十七日
 大正十三年五月十七日
 大正十四年五月十七日
 大正十五年五月十七日
 大正十六年五月十七日
 大正十七年五月十七日
 大正十八年五月十七日
 大正十九年五月十七日
 大正二十年五月十七日

著者 阿部 七五三吉
 同 谷 鏗 太郎
 發行者 東京市京橋區銀座一丁目廿二番地
 大日本圖書株式會社
 右代表者 宮川 保全

定價
 卷の 一... 67 錢
 卷の 二... 61 錢
 卷の 三... 50 錢
 卷の 四... 42 錢
 教授法の卷... 45 錢

大正八年
 臨時定價 金五拾九錢
 訂正師範
 學校圖畫教科書



建築製圖

広島大学図書

2000301415

